

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（新潟大学・教育学部）

授業科目名	教育方法・技術 A
教員名（専門分野）	阿部 好策（教育方法学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	<u>必修</u> ・選択・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）
単位数・受講者数	2単位 ・ 160名
対象課程・対象学年	<u>学部</u> ・修士・教職大学院 3年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所 に下線）	<p>第1回 最近の学生の傾向と教育実践上の課題（初回）</p> <p><u>第1章 問題行動の発端と「優れた教育実践」</u></p> <p>第2回 <u>校内暴力の増加とその克服について（中学校・ビデオ）</u></p> <p>第3回 <u>いじめ・差別の増大とその克服について（小学校・ビデオ）</u></p> <p>第2章 教育的関係を考える</p> <p>第4回 1970年代の教育的挑発論</p> <p>第5回 1980年代のまなざし論</p> <p>第3章 授業における教師のリーダーシップ</p> <p>第6回 授業用語と授業形態</p> <p>第7回 教材解釈・発問づくり</p> <p>第8回 共同探究のリーダーシップ</p> <p>第4章 教育方法論争に学ぶ</p> <p>第9回 「ゆさぶり」と授業の構想力</p> <p>第10回 授業づくりと学級づくり</p> <p>第11回 学び論と指導論</p> <p><u>第5章 いじめ問題にどう取り組むか</u></p> <p>第12回 <u>いじめの変化と追求実践の限界</u></p> <p>第13回 <u>異質排除とその対策</u></p> <p>第14回 <u>パワーゲームとその対策</u></p> <p>第15回 <u>ネットいじめとその対策</u></p>

## 【授業内容】

### (第2回：校内暴力の増加とその克服について (中学校・ビデオ))

まず1983年にNHKで放映された校内暴力特集を見せた。次に、当時の新潟では校内暴力や廊下での劇場的いじめにどう取り組んだかが資料提示された。

### (第3回：いじめ・差別の増大とその克服について (小学校・ビデオ))

90年代初頭にRKB毎日とNHKで放映された北九州・仲間市の小学校の実践ビデオと資料を見せた。この小学校は院生時代の研究協力校である。「学習集団づくりによっていじめ・差別をなくした事例」として考察させた。

### (第12回：いじめの変化と追求実践の限界)

「いじめの歴史的変化」を取り上げ、「いじめは昔からあり、その変化をみきわめた対応が大切だ」という点を強調した。1955年の『学級革命』(注①)以降の変化として①ガキ大将のいじめ→②劇場的いじめ→③隔離されたいじめ→④ネットいじめを大づかみさせた。次に③への変化に気づかなかった取り組み(注②)の限界を考えさせた。

### (第13回：異質排除とその対策)

「現代のいじめ」で、バイキングゲームのような異質排除型のいじめが急増した背景とその対策を考えさせた。増加の背景としては脱工業化以降の家庭文化のちがいや経済格差の拡大がある。だから、ただ「ちがいを認め合わせる」(個性を生かす教育)だけでは、生活にねざすダサイ・キモイ感覚は振り払えない。「ちがうから学び合える・助け合える」という異質共同教育を、具体的かつ強力に推進する必要があることを指摘した。

### (第14回：パワーゲームとその対策)

「現代のいじめ」で自殺や殺人に至るパワーゲームを取り上げた。パワーゲームは、今日の多元的能力主義やテスト漬けの学校教育体制と関係する。公的な承認において「力」を抜き取られた者たちが、自己肯定感や生きる自信を取り戻そうとするいじめである。上越市の中学校で当時優等生の生徒が自殺した事件(注③)、佐世保市の中高一貫校づくりを背景とした「小6女子殺害事件」などを例に、クラスの代表格の子や、何らかの力のある子が思いがけない攻撃にさらされるいじめの実態とその対策を考えさせた。

### (第15回：ネットいじめとその対策)

最近のネットいじめを取り上げ、このいじめを「ツール(手段)が変わっただけ」と考えない点を強調した。一つには、ツールの変化がいじめの質も変化させる。いわゆる「匿名性のいじめ」は、仲の良い子も疑うようになるという「人間不信」をつのらせる。しかしその点をふまえても、対策が「ネットの使い方の指導」に解消されてはならない。ネットいじめの仕掛け人には、学級・学校でいじめられる側の子も多い。親を巻き込むネットでの授業批判もあり、いま広範囲に「学校教育への抵抗運動」が起きていることを、教師たちは気づいていない。この意味で、もはや信用されない教育関係者だけのいじめ対策を見直すべきなのである。



## 【授業内容】

### (第7回：いじめの対応とその防止(1)：いじめの対応とその防止)

従来のいじめの定義とその見直し、小学校・中学校・高等学校における具体的ないじめの例、集団力動の観点および加害者側の想像力の欠如という観点から捉えたいじめの背景、今日的ないじめの特徴とその実例、学校で見られるいじめの一次的・二次的兆候、いじめへの対応、いじめの予防に関する基礎的な事項を講じた後、いじめの初期徴候と考えられる「からかい」が生じている学級の仮想事例を呈示し、この仮想事例が生じた学級の担任としてどのような生徒指導を行うか、①個別的な対応、②学級への対応、それぞれについて具体的な指導計画を立てるレポートを課す。

### (第8回：いじめの対応とその防止(2)：いじめ防止の方法)

第7回で課したレポートをもとに、仮想事例への対応について全体討論を行うことを伝え、司会2名、記録2名を指名した後、まず、バズセッションを行い、いくつかのグループから具体的な指導計画に発表させる。しかる後、全体討論を行い、最後に各々が考えてきた指導計画の改善案を作成させる。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（新潟大学・教育学部）

授業科目名	教育心理学
教員名（専門分野）	神村 栄一(臨床心理学)
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 必修・選択・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	教職の基礎理論に関する科目 ・幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）
単位数・受講者数	2単位 ・ 105名
対象課程・対象学年	<input checked="" type="checkbox"/> 学部・修士・教職大学院 1年生対象
授業計画 (いじめに該当する箇所 に下線)	<p>3回目以降は、原則としてテキストに基づいてすすめていく。 (必ずしもテキストの章立ての順にすすむとは限らない)</p> <p>第1回 授業への導入、心のはたらきについて</p> <p><u>第2回 学校教育の諸問題、特に、不登校やいじめについて</u></p> <p>第3回 記憶について①(教科書1章から) 短期記憶、長期記憶、忘却、</p> <p>第4回 記憶について②(教科書1章から) 意味づけの効果、処理の水準、</p> <p>第5回 学ぶ・考える(教科書2章から) 知識の構造、問題解決、</p> <p>第6回 経験から学ぶこと①(教科書3章から) 古典的条件付け、道具的条件付け、</p> <p>第7回 経験から学ぶこと②(教科書3章から) 観察、自己強化による学習、</p> <p>第8回 意欲について①(教科書4章から) 期待と価値、統制感、</p> <p>第9回 意欲について②(教科書4章から) 原因帰属、内発的動機づけ、</p> <p>第10回 学級という社会(教科書5章から) 教師の期待、学級、子どもの人間関係、</p> <p>第11回 教授方法(教科書6章から) 学習の形態、適性処遇交互作用</p> <p>第12回 教育評価①(教科書7章から) 教育評価の種類とねらい、</p> <p>第13回 教育評価②(教科書7章から) 偏差値って何、</p>

第14回 教育評価③（教科書7章から）

心理テスト等、

第15回 まとめ（教科書全体から）

今日の教育問題にとりくむ教育心理学

### 【授業内容】

（第2回：学校教育の諸問題、特に、不登校やいじめについて）

「平成22年度文部科学省資料（平成24年2月）「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/02/\\_icsFiles/afiedfile/2012/02/06/1315950\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/02/_icsFiles/afiedfile/2012/02/06/1315950_01.pdf)）」などの資料に基づき、小中高等学校でのいじめの実態、現場での対応とその成果、などについて、解説している。

指導上のポイントは以下のとおりである。

- ①小中学校において、暴力行為（対教師、対児童生徒間、器物破損）の増加傾向が認められること、
- ②いじめという言葉が本来持つ問題、定義の変遷、認定の難しさ、
- ③過去の主ないじめ事件の内容、その影響、過去のいじめ件数の変動、
- ④学年別の発生率について、特に、中1ギャップ現象について、
- ⑤いじめ（攻撃）のタイプ分け、いじめの構造、その心理学理論の紹介、
- ⑥いじめ発見の手段について、
- ⑦いじめへの対応について現在学校現場で行われていることの紹介、その問題点の確認、
- ⑧いじめと関連する問題として、非行、不登校、いじめ被害者が受ける心の傷の影響について、

教職科目に関連する心理学科目の基礎であることを考慮し、いじめ、攻撃の基礎心理学的理論（道具的攻撃、感情的攻撃、集団心理による攻撃、責任の分散等集団のダイナミクス、保身によるいじめ、攻撃性の学習、道徳性の発達、社会的スキルの形成）などについて、解説を行っている。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（新潟大学・教育学部）

授業科目名	発達心理学
教員名（専門分野）	神村 栄一(臨床心理学)
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	必修・ <span style="border: 1px solid black;">選択</span> ・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	教職の基礎理論に関する科目 ・幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）
単位数・受講者数	2単位 ・ 168名
対象課程・対象学年	<span style="border: 1px solid black;">学部</span> ・修士・教職大学院 2年生対象
授業計画 (いじめに該当する箇所 に下線)	<p>3回目以降は、原則としてテキストに基づいてすすめていく。 (必ずしもテキストの章立ての順にすすむとは限らない)</p> <p>第1回 授業への導入、発達とは 新生児の世界</p> <p>第2回 虐待等、子育て困難にともなう諸問題、</p> <p>第3回 発達について考える①（教科書8章から） 発達とは、遺伝と環境</p> <p>第4回 発達について考える②（教科書8章から） 臨界期・鋭敏期について</p> <p>第5回 知的発達のメカニズム①（教科書9章から） 知能について、その測定について</p> <p>第6回 知的発達のメカニズム②（教科書9章から） ピアジェ心理学を学ぶ</p> <p>第7回 人格発達の基礎①（教科書10章から） フロイト・エリクソンの発想を学ぶ</p> <p>第8回 人格発達の基礎②（教科書10章から） 母子のきずな、アタッチメント</p> <p>第9回 発達障害について①（教科書10章から） 発達障害とは、そのバリエーション</p> <p>第10回 発達障害について②（教科書10章から） 発達障害の理解と支援</p> <p>第11回 発達障害について③（教科書10章から）</p> <p>第12回 問題行動の具体的支援①（教科書11章から） 行動療法・応用行動分析による理解と対応①</p> <p>第13回 問題行動の具体的支援②（教科書11章から） 行動療法・応用行動分析による理解と対応②</p> <p>第14回 問題行動の具体的支援③（教科書11章から）</p>

行動療法・応用行動分析による理解と対応③

第15回 情緒の不安定さを支援する（教科書11章から）

認知療法の発想と応用

【授業内容】

（第14回：問題行動の具体的支援③（教科書11章から）行動療法・応用行動分析による理解と対応③）

「平成22年度文部科学省資料（平成24年2月）「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/02/\\_icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315950\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/02/_icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315950_01.pdf)）」などの資料に基づき、小中高等学校でのいじめの実態、現場での対応とその成果、などについて、解説している。

指導上のポイントは以下のとおりである。

- ①発達の中での、暴力、攻撃性の変化、
- ②小学校低学年から、高学年、中学校前半、後半、高等学校での、いじめの内容の変化、
- ③中1ギャップ現象としてのいじめ増加の発達心理学的背景について、
- ④発達段階に応じたいじめ発見、指導対応、未然予防策について、
- ⑤いじめと関連する問題として、非行、不登校、いじめ被害者が受ける心の傷の影響について、

教職科目に関連する発達心理学科目であることを考慮し、いじめの発達段階別の発生数、内容メカニズムについて、おそび、それらに応じた、対応策解説を紹介している。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（新潟大学・教育学部）

授業科目名	発達心理学A
教員名（専門分野）	小堀 彩子（臨床心理学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	必修・ <span style="border: 1px solid black;">選択</span> ・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	教職の基礎理論に関する科目 ・幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）
単位数・受講者数	2単位 ・ 15名
対象課程・対象学年	<span style="border: 1px solid black;">学部</span> ・修士・教職大学院 3, 4年生対象
授業計画 (いじめに該当する箇所 に下線)	<p>第 1回 生涯発達の視点</p> <p>第 2回 乳幼児期の心の発達の特徴</p> <p>第 3回 虐待</p> <p>第 4回 子育て支援と育児の大変さ</p> <p>第 5回 児童期の心の発達の特徴</p> <p>第 6回 発達障害</p> <p><u>第 7回 不登校・いじめ</u></p> <p>第 8回 思春期・青年期の発達の心の発達の特徴</p> <p>第 9回 食の問題</p> <p>第10回 アパシー・大学生と就職活動</p> <p>第11回 中年期の変化と心理的問題</p> <p>第12回 職業ストレスとワーク・ライフ・バランス</p> <p>第13回 家族の変化</p> <p>第14回 老年期の変化と心理的問題</p> <p>第15回 老年期の捉え方・認知症</p>

## 【授業内容】

(第7回：不登校・いじめ )

※上記内容のうち、「いじめ」に関わる部分のみ抜粋して、概要を以下に示します。

### ○いじめとは

- ・いじめの定義
- ・いじめの捉え方
- ・近年のいじめの特徴 (Cyberbullying : ネットいじめ)

### ○いじめを引き起こす要因, 悪化させる要因

- ・いじめられる子の特徴 :

### ○いじめる子についての要因

- ・本人の持つストレスや欲求不満をいじめの形で発散。
- ・子どもは元来多少なりいじわるな心を持っており, いじめをしやすいものという立場も。  
→いじめたいという心境になった折, 「それは悪いことだからやめておこう」という道徳的判断が発動するかどうかが大きなカギ。

### ○人はなぜ, 道徳的判断が揺らぐのか?

- ・道徳性研究
- ・代表的な認知発達の見点からの道徳性の研究  
Piaget, J. 以前とその後, Kohlberg, L へ
- ・最近の道徳性研究の動向
- ・共感的感情の生起のしやすさとしにくさ

### ○いじめが起きた際の対応

- ・二次的な被害や再発を防ぐ。
- ・いじめが起こりにくい環境を作る。
- ・不登校やいじめを理解し対処するための視点としての子どもの適応感の査定。



**【授業内容】**

第8回 特別支援教育とその関連領域 (1) いじめ

- ・いじめの定義、実態、発生のメカニズムを概説する。
- ・発達障害との関係を説明する。
- ・学校教育現場でのいじめへの対応（被害者、加害者、保護者、関係機関との連携）、予防のための教育、事例を説明する。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（上越教育大学）

授業科目名	実践セミナー I 「臨床心理学」
教員名（専門分野）	内田一成（臨床心理学）・五十嵐透子（臨床心理学）・加藤哲文（臨床心理学）・佐藤淳一（臨床心理学）・高橋靖子（臨床心理学）・宮下敏恵（臨床心理学）・山本隆一郎（臨床心理学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	必修・選択・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	_____
単位数・受講者数	2 単位 ・ 5 名
対象課程・対象学年	<u>学部</u> ・修士・教職大学院 3 年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所 に下線）	<p>全 15 回の授業の中で、学部 3 年生・学部 4 年生の教育実習経験や、修士課程 1 年生の現職教員の教育実践に関する臨床心理学的テーマ（児童生徒との関わり方・不登校・<u>いじめ</u>・非行・発達障害・学級経営・特別支援教育・校内相談体制・保護者の問題・外部機関との連携）を発表し、教育実践の振り返りと教育場面における臨床心理学的テーマに関する具体的対応に関する討論を行う</p> <p>第 1 回：オリエンテーション                  第 2 回～第 1 3 回：臨床心理学的テーマ（児童生徒との関わり方・不登校・<u>いじめ</u>・非行・発達障害・学級経営・特別支援教育・校内相談体制・保護者の問題・外部機関との連携などに関する発表）                  第 14 回～第 15 回まとめ</p>

## 【授業内容】

教育実践場面における臨床心理学的テーマ（いじめ）

発表者が教育実践場面でのいじめやいじめに関連する事柄に関する事例を報告し、3つのグループでいじめ対応の対応に関して討論を行い発表する。最後に、担当教員がいじめの基本的認識とそれらの対応に関して講評を行う。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（上越教育大学）

授業科目名	実践セミナーⅡ「臨床心理学」
教員名（専門分野）	内田一成（臨床心理学）・五十嵐透子（臨床心理学）・加藤哲文（臨床心理学）・佐藤淳一（臨床心理学）・高橋靖子（臨床心理学）・宮下敏恵（臨床心理学）・山本隆一郎（臨床心理学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	必修・選択・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	_____
単位数・受講者数	2単位 ・ 5名
対象課程・対象学年	<span style="border: 1px solid black;">学部</span> ・修士・教職大学院 4年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所 に下線）	<p>全15回の授業の中で、学部3年生・学部4年生の教育実習経験や、修士課程1年生の現職教員の教育実践に関する臨床心理学的テーマ（児童生徒との関わり方・不登校・<u>いじめ</u>・非行・発達障害・学級経営・特別支援教育・校内相談体制・保護者の問題・外部機関との連携）を発表し、教育実践の振り返りと教育場面における臨床心理学的テーマに関する具体的対応に関する討論を行う</p> <p>第1回：オリエンテーション                  第2回～第13回：臨床心理学的テーマ（児童生徒との関わり方・不登校・<u>いじめ</u>・非行・発達障害・学級経営・特別支援教育・校内相談体制・保護者の問題・外部機関との連携などに関する発表）                  第14回～第15回まとめ</p>

## 【授業内容】

教育実践場面における臨床心理学的テーマ（いじめ）

発表者が教育実践場面でのいじめやいじめに関連する事柄に関する事例を報告し、3つのグループでいじめ対応の対応に関して討論を行い発表する。最後に、担当教員がいじめの基本的認識とそれらの対応に関して講評を行う。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（上越教育大学）

授業科目名	設例教育法規演習
教員名（専門分野）	辻野 けんま（教育法制，比較教育）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	必修・ <span style="border: 1px solid black;">選択</span> ・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	教育の基礎理論に関する科目 ・教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想
単位数・受講者数	2単位 ・ 5名
対象課程・対象学年	<span style="border: 1px solid black;">学部</span> ・ 修士 ・ 教職大学院 3年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所に下線）	<p>第1回：オリエンテーションー教育と法ー</p> <p>第2回：講義・演習①教育法制概論</p> <p>第3回：講義・演習②学校事故</p> <p>第4回：講義・演習③校則・生徒指導</p> <p>第5回：総括的討議Ⅰ</p> <p>第6回：講義・演習④授業・学力問題</p> <p>第7回：講義・演習⑤指導要録・内申書</p> <p><u>第8回：講義・演習⑥いじめ</u></p> <p>第9回：講義・演習⑦教員の懲戒・分限</p> <p>第10回：総括的討議Ⅱ</p> <p>第11回：講義・演習⑧教育行政</p> <p>第12回：講義・演習⑨教育裁判</p> <p>第13回：講義・演習⑩学校経営と教員</p> <p>第14回：総括的討議Ⅲ</p> <p>第15回：まとめー新しい時代の教職専門性ー</p>

## 【授業内容】

- 0 導入・・・大津いじめ事件についての意見交流
- 1 演習（ケース学習①）・・・「いわき市立中学校いじめ事件」
- 2 講義・・・実際に教員が対応に悩むいじめケース（大学院在学現職院生へのアンケート，2010年）
- 3 演習・・・ロールプレイ（悪口を言う立場／言われる立場を両方経験する）
- 4 講義・・・いじめ裁判の争点と学校・教員の責務
- 5 講義・・・いじめ自殺裁判における保護者の権利
- 6 演習（ケース学習②）・・・「町田いじめ作文開示訴訟および報告義務訴訟」

※1 上記の内容を約2コマ分（第7回・第8回）で行った。

※2 ケース学習については、(1)事例についての討議→(2)判例→(3)学説紹介という流れで行った。

※3 ロールプレイについては受講者全員参加の形式で、いじめる／いじめられる役割を経験し、両者の心情に関する意見交流を行った。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（上越教育大学）

授業科目名	教育相談・カウンセリング論
教員名（専門分野）	宮下敏恵（臨床心理学）、五十嵐透子（臨床心理学）、加藤哲文（臨床心理学）、高橋靖子（臨床心理学）、佐藤淳一（臨床心理学）、山本隆一郎（臨床心理学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 必修・ <input type="checkbox"/> 選択・ <input type="checkbox"/> 選択必修・その他（ <input type="checkbox"/> ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目・教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法
単位数・受講者数	2単位 ・ 約 181 名
対象課程・対象学年	<input checked="" type="checkbox"/> 学部・ <input type="checkbox"/> 修士・ <input type="checkbox"/> 教職大学院 3年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所 に下線）	<p>第1回：学校現場における教育相談の必要性</p> <p><u>第2回：児童・生徒の問題行動 いじめ</u></p> <p>第3回：児童・生徒の問題行動 不登校</p> <p>第4回：学校における危機介入</p> <p>第5回：外部機関との連携</p> <p>第6回：心理アセスメント①</p> <p>第7回：心理アセスメント②</p> <p>第8回：児童・思春期の健康関連行動に関する知識</p> <p>第9回：カウンセリングの考え方と援助方法①</p> <p>第10回：カウンセリングの考え方と援助方法②</p> <p>第11回：教師に必要な児童期の精神病理の知識①</p> <p>第12回：教師に必要な児童期の精神病理の知識②</p> <p>第13回：教師に必要な思春期の精神病理の知識①</p> <p>第14回：教師に必要な思春期の精神病理の知識②</p> <p>第15回：発達障害の支援と連携</p>

## 【授業内容】

教育相談に関連する児童生徒の問題行動について講義する中でいじめの問題をとりあげている。

その中ではまず、いじめ問題に関して生じやすい誤解をあげ、いじめに関する基本的知識を説明している。

そして、いじめはなぜ生じるのかについて、いじめ加害者の心理から、いじめ被害者の心理から、学級集団の心理からの3点から説明を行っている。最初にいじめ加害者の心理的背景に関するいくつかの理論、考え方を説明し、いじめ加害者の理解について概説を行っている。さらに、いじめ被害者に対する援助について、しっかりとまもることはもちろんであるが、長期的な視野に立っての支援も必要であることを説明している。そして、学級集団の心理としていじめが生じやすい雰囲気について説明を行っている。

最後にいじめへの対応についてどのようにしたらよいかについて解説を行っている。

授業の途中においてはいじめの早期発見に向けて、保護者から電話がかかってきた場面を指定し、担任の先生となった場合にどのような点に気をつけどのように対応するか、グループ討議を行わせ、より具体的な対応を自分たちで考えるような課題を行わせている。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（富山大学・人間発達科学部）

授業科目名	教育相談
教員名（専門分野）	小林 真（心理学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	<u>必修</u> ・選択・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	生徒指導，教育相談及び進路指導等に関する科目 教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法
単位数・受講者数	2単位 ・ 80名
対象課程・対象学年	<u>学部</u> ・修士・教職大学院 1年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所 に下線）	<p>第1回 教育相談活動について 教育相談活動の特徴 / 教育相談活動の考え方(予防理論)</p> <p>第2回 学校ストレスについて① ストレッサーとストレス反応について</p> <p>第3回 学校ストレスについて② 児童生徒のストレス反応の実際</p> <p>第4回 学校ストレスについて③ 学校ストレスと教育カウンセリング</p> <p>第5回 特別支援教育について① 特別支援教育の基本的な考え方 / コーディネーターの役割</p> <p>第6回 特別支援教育について② 学習障害の理解と対応</p> <p>第7回 特別支援教育について③ 注意欠陥多動性障害の理解と対応</p> <p>第8回 特別支援教育について④ 高機能広汎性発達障害の理解と対応</p> <p>第9回 不登校について① 不登校の概念の変遷・実態の変化</p> <p>第10回 不登校について② ストレス理論から見た不登校の理解</p> <p>第11回 不登校について③ 不登校への対応</p> <p><u>第12回 いじめについて①</u> <u>いじめによる心の傷・ネットいじめの実態</u></p> <p><u>第13回 いじめについて②</u> <u>いじめへの対応</u></p>

<p>授業計画 (いじめに該当する箇所 に下線)</p>	<p>第 14 回 開発的カウンセリングについて① 開発的カウンセリングの考え方 構成的グループエンカウンター</p> <p>第 15 回 開発的カウンセリングについて② ソーシャルスキル・トレーニング ストレスマネジメント教育</p>
--------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

**【授業内容】**

第 12 回 いじめについて① いじめによる心の傷・ネットいじめの実態

小林正幸(編著)『実践入門教育カウンセリング』(川島書店)の「7章 いじめ・いじめられ」の内容を参考に、いじめによる心の傷が深くなるのはどのような場合かを講義する。また、読売新聞「教育ルネサンス」に掲載されたいじめの特集記事の一部を配布し、いじめの実態(ネットいじめを含む)や様々な対策例を紹介する。

第 13 回 いじめについて② いじめへの対応

前掲書の「7章 いじめ・いじめられ」に紹介されているいじめの事例を2つ取り上げ、教師がいじめられている子ども・いじめている子どもにどのように接すればよいかを解説する。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（富山大学・教養教育）

授業科目名	現代と教育
教員名（専門分野）	竹村 哲（問題解決学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	必修・ <span style="border: 1px solid black;">選択</span> ・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	_____
単位数・受講者数	2単位・ 21名
対象課程・対象学年	<span style="border: 1px solid black;">学部</span> ・修士・教職大学院 2年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所 に下線）	<p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 （第1部）持続可能な開発のための教育的使命である（一般的）問題解決能力養成に関する概説</p> <p>第3回 経験的学びと自己研究（セルフスタディ）</p> <p>第4回 学習者コンピテンシ（自己尊重、説明責任、継続的学習）</p> <p>第5回 帰納・演繹・弁証的な対話</p> <p>第6回 （第2部）モラトリアムにおける「自分とは何ぞや」と問う私の自己充足的統合に関する概説</p> <p>第7回 現象哲学的アプローチを中心とする学際的諸説の帰納的考察</p> <p>第8回 自己意識モデル論</p> <p>第9回 行動特性検査とプロファイリングゲーム</p> <p>第10回 経験的自己のスキーマとキャリアアンカー／ 【課題レポート】</p> <p>第11回 （第3部）関わり認識を共有する風土を形成する教育のカタチに関する概説</p> <p><u>第12回 いじめ関連記事収集とカード作成</u></p> <p>第13回 構造図の作成</p> <p>第14回 グループ発表・質疑</p> <p>第15回 まとめ</p>

## 【授業内容】

共生社会を実現するために今日の高等教育に課せられた第一の使命は、未来の“学識ある市民”を育てることである。ただし、学識とは決して知識のみを意味しているのではなく、技術力を安易に指しているのでもない。むしろそれらを活かしてわかるという認識力、回答の創造力、さらに自らの経験を踏まえて価値判断できる見識力までも含意している。本講の目的は、学生に学識ある市民として求められる経験的学びの態度を発揚することである。

本講では、学習者が学びあい“何がわかったか、どのようにわかったかがわかる”ための方略を、発見・統合・応用の回答を帰納・演繹そして弁証的な対話によって学ぶスタイル(セルフスタディ)に立脚しながら学ぶ。セルフスタディとは、学生に限らず全てのものが学習者として直面するであろう自己と関わりの問いに対する一つの回答法である。

授業は3部構成になっている。

第1部では、セルフスタディの理解を深めるため経験的な学び、学びと学びあいの関係、持続可能な開発のための資質について検討する。

第2部では、輻輳的な自己形成の様態と現在の行動特性について調べ、学生同士で点検し、自己開示と相互理解の態度を養成する。

第3部では、現代的な教育課題に関する学びあいを実践する。今年はいじめ問題を取り上げ、最近の記事をもとに各自が問題を分析し、互いの質疑を通じながら原因や対策などについての認識を明晰化する。

キーワード：

持続可能な開発、学識ある市民、経験的学び、学びあい、いじめ

教科書：

竹村哲（著）自己と関わりの創造学—セルフスタディの教育研究（大学教育出版，2012）

参考書：

竹村哲（著）自分らしさのシステム思考（ナカニシヤ出版，2007）

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（富山大学・人間発達科学部）

授業科目名	情報と職業
教員名（専門分野）	竹村 哲（問題解決学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	<u>必修</u> ・選択・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	高等学校教諭1種免許状（情報） 教科に関する科目 「情報と職業」
単位数・受講者数	2単位 ・ 7名
対象課程・対象学年	<u>学部</u> ・修士・教職大学院 3年生対象
授業計画 (いじめに該当する箇所 に下線)	<p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：知的生産プロセスと広義な情報</p> <p>第3回：価値創造のプロフェッション</p> <p>第4回：(第1部) システムインテグレータとしての役割と校務情報化のための設計</p> <p>第5回：システムインテグレータのキャリアアップ</p> <p>第6回：校務情報化のための設計</p> <p>第7回：(第2部) イベントプロデューサー（コミュニケーター）としての役割と総合的学習の演出</p> <p>第8回：イベントのコーディネーション</p> <p>第9回：主体的な学びの演出法</p> <p><u>第10回：イベント「いじめ問題を考える」の実践</u></p> <p>第11回：(第3部) キャリアカウンセラーとしての役割と自己理解の指導</p> <p>第12回：キャリアカウンセラーのラポールビルディング</p> <p>第13回：プロフィールのロールプレーイング</p> <p>第14回：自己のスキーマとキャリアアンカーの発見</p> <p>第15回：まとめ</p>

### 【授業内容】

本科目では、広義な情報を活かす特徴的な職種を取り上げ、その役割特性について実践的に考える。広義な情報とは、知的生産プロセスを介する意味媒体である。したがってデジタル化されコンピュータで扱うことができる狭義の情報だけではなく、それと人間のヒューリスティックな意味づけとの統合体である。ここでは、この情報を扱い、さらに価値創造することが求められるプロフェッションを取り上げる。

本講で着目するのは、従来代表的な情報専門職とされているシステムインテグレータ、さらに第4のメディアであるイベントを通じて多様な価値を創造するイベントプロデューサやイベントコミュニケーターである。また高度情報社会にあってキャリアアンカーの意味付けを支援するキャリアカウンセラーの活動にも情報の統合化は今や避けられないことから、これについても取り上げる。

授業では、実践を踏まえながらこれらの特質について理解し、同時に教師の現代的マネジメント・スキルとしての有意性についても検討する。

キーワード：

情報化社会、価値創造、プロフェッション、キャリアコンピテンシ、情報活用、いじめ

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（富山大学・人間発達科学部）

授業科目名	情報教育演習
教員名（専門分野）	竹村 哲（問題解決学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	必修・ <u>選択</u> ・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	高等学校教諭1種免許状（情報） 教科に関する科目 「情報社会及び情報倫理」
単位数・受講者数	2単位 ・ 9名
対象課程・対象学年	<u>学部</u> ・修士・教職大学院 2年生対象
授業計画 (いじめに該当する箇所 に下線)	<p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 生きる力と情報教育教材に関する説明</p> <p>第3回 生きる力と情報教育に関する意見交換</p> <p><u>第4回 N I Eの説明といじめ記事データベース検索法実習（聞蔵Ⅱ等）</u></p> <p><u>第5回 いじめ記事〔現物〕調査とスクラップ作成法実習</u></p> <p>第6回 カード作成（1）</p> <p>第7回 カード作成（2）</p> <p>第8回 島構造図解（ラベリングと関係付け）</p> <p>第9回 階層構造図解（全体論的解釈）</p> <p><u>第10回 いじめ問題の本質定義と解決に向けた提言に関する検討</u></p> <p>第11回 レポート作成</p> <p>第12回 プレゼンテーション作成</p> <p>第13回 発表と全体質疑（1）</p> <p>第14回 発表と全体質疑（2）</p> <p>第15回 振り返りとまとめ</p>

## 【授業内容】

広義の情報教育としてのN I Eの意義を理解する。いじめ問題を取り上げ、主体的な学習活動としてN I Eを活かし、ラベルワークによって問題発見と解決の能力を高めるスキルを身につける。

情報化社会にあつて若者を中心として活字離れが進んでいる。情報は蔓延し、またインターネットを介した様々なサービスを通じて労なく必要(?)な情報を得ることができる。この便益環境に慢心した結果として言わば情報肥満に陥ってしまっている。近年、これに対する危機感から一部の初等中等教育ではN I E(教育に新聞を)活動の取り組みがはじまっている。本演習は、主体的に学習するスキル(アカデミックスキル)を養成することを目指したN I Eの演習である。

知的生産活動のプロセス従いながら、記事データベースを活用して情報を収集し、Microsoft Officeを使ってアイデアをカード化し、ラベルワークによって自らの考えを図解し、仮説を発見し、考えを文章化し口述し、討議する。

キーワード：

N I E (Newspaper in Education)、アカデミックスキルズ、情報リテラシー、認識外在化、問題発見、問題解決、いじめ

教科書：

藤岡完治・大島聡(編) 学校を変える情報教育ー生きる力を育てるためにー, 国土社(1999)

参考書：

竹村哲(著) 問題を科学するーシステム分析と発想の視点ー,海文堂出版(第二版2002,[初版2000])

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（富山大学・人間発達科学部）

授業科目名	人間情報ゼミナール
教員名（専門分野）	竹村 哲（問題解決学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	必修・ <span style="border: 1px solid black;">選択</span> ・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	_____
単位数・受講者数	2単位 ・ 4名
対象課程・対象学年	<span style="border: 1px solid black;">学部</span> ・修士・教職大学院 3年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所に下線）	<p>ゼミナールにおける質疑・対話を通じて問題意識の明晰化を図る。 （期末までに課題研究レポートの提出）</p> <p>研究指導している学生のテーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. コミュニケーション能力養成のための研究</li> <li>2. 教育における南北問題／途上国の教育支援のために何が求められているのか</li> <li>3. <u>反抗期といじめの関連性に関する研究</u></li> <li>4. <u>いじめの実態と対応に関する研究</u></li> <li>5. 震災時における教師対応に関する研究／福島第一原発事故を例に</li> <li>6. 学習困難者の実態と対策に関する研究</li> <li>7. 富大生の平均的人物像のプロファイリング</li> </ol>

### 【授業内容】

当ゼミナールは、教職希望学生（高等教育教職も含む）を主な対象として、教科にかかわらず、学校教育や校務における諸問題に対応し自らが成長するためのコンピテンシを培うことを主眼としている。人間発達科学部は、理学・経済・人文・工学・医学などの専門を学ぶ学部ではない。本学部生の専攻は、あくまでも（広義も含めた）教育であり、これら専門の教育研究である。学部理念である「人を教えるヒトを育てる」にあるように、学生がいずれ教える立場に立つことを念頭において教育しているのである。

ただし、学生が教師になることは現時点での自己充足的な目標であって目的ではない。本当の目的は、教職を通じて自己実現することであると考えている。

以上の点を踏まえて当ゼミナールでは、教職についてからも持続可能なテーマを学生に選択させ半学半教の学びあいを行っている。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（富山大学・人間発達科学部）

授業科目名	学校の制度と経営
教員名（専門分野）	久保田 真功（教育社会学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	<u>必修</u> ・選択・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	教育の基礎理論に関する科目 教育に関する社会的、制度的又は経営的事項
単位数・受講者数	2 単位数・75 名
対象課程・対象学年	<u>学部</u> ・修士・教職大学院 2 年生対象
授業計画 (いじめに該当する箇所 に下線)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 学校の歴史（学校の起源、古代の学校、下構型学校系統・上構造型学校系統、3つの学校体系等）</li> <li>3. 日本における戦後の学校制度Ⅰ（一条校、各一条校の目的、一条校以外の学校等）</li> <li>4. 日本における戦後の学校制度Ⅱ（一条校、各一条校の目的、一条校以外の学校等）</li> <li>5. 公教育組織制度を保障するための法体系</li> <li>6. <u>いじめⅠ（文部科学省のいじめ統計をどのように解釈するのが適切か）</u></li> <li>7. <u>いじめⅡ（いじめ研究の歴史の変遷、いじめ集団の四層構造論の意義と課題）</u></li> <li>8. <u>いじめⅢ（学級集団といじめ）</u></li> <li>9. 不登校</li> <li>10. ゆとり教育と学力低下</li> <li>11. ゆとり教育のあおりを受けたのは誰か（社会階層と学力）</li> <li>12. 教育職員の制度Ⅰ（教育職員の種類と職務、教育職員の免許状と任用、教育職委の研修、教育職員の服務、教育職員の分限と懲戒）</li> <li>13. 教育職員の制度Ⅱ（教育職員の種類と職務、教育職員の免許状と任用、教育職委の研修、教育職員の服務、教育職員の分限と懲戒）</li> <li>14. バーンアウトする教師</li> <li>15. まとめ</li> </ol>

## 【授業内容】

### 1. いじめⅠ（文部科学省のいじめ統計をどのように解釈するのが適切か）

1985 年度以降、文部科学省（旧文部省）はいじめに関する統計を取り続けている。その結果は、新聞などのメディアで大きく取り上げられ、昨年度と比べて“いじめが増えた、あるいは、減った”ということが議論される。その際に前提とされているのが、文部科学省のいじめに関する統計がいじめの実態を直接反映している、ということである。本単元では、こうした前提の妥当性について検討するとともに、“文部科学省のいじめ統計をどのように解釈するのが適切なのか”という点について考える。

### 2. いじめⅡ（いじめ研究の歴史的変遷、いじめ集団の四層構造論の意義と課題）

いじめに関する研究が本格化したのは、1980 年代半ば以降のことである。その際、研究者が最も大きな関心を寄せたのは、“なぜいじめが発生するのか”という問題である。本単元では、いじめの発生要因に関する諸仮説を整理するとともに、これらの仮説がどのように展開していったのか、という点について検討する。

また、今日では、いじめは被害者・加害者といった当事者間だけの問題ではなく、学級集団全体の在り方が問われる問題であると考えられている。このような考え方の転換をもたらしたものとして、「いじめ集団の四層構造論」がある。そこで、本単元では、「いじめ集団の四層構造論」について説明するとともに、その意義と課題について検討する。

### 3. いじめⅢ（学級集団といじめ）

かつて、いじめは日本特有の現象であると考えられていた。しかし、1990 年代半ば以降、海外にも日本のいじめとよく似た現象が存在することが知られるようになってきた。こうした状況のなか、いじめの国際比較調査が行われた。その結果、日本のいじめの特徴が、“主として学級を舞台として生じるとともに、学級における狭い対人関係のなかで生じる”ことにあることが明らかとなった。この結果に鑑みれば、日本のいじめについて論じる際、学級集団といじめとの関係について検討することが必要不可欠となる。

そこで本単元では、学級集団といじめとの関係について検討する。その際のアプローチの仕方は、次の 2 つである。1 つは、どの学級集団にも共通して見られる学級集団の制度的・構造的特質がいじめの発生とどのように関係しているのか、を問うことである。もう 1 つは、個々の学級集団によって異なる雰囲気や特性といったものがいじめの発生とどのように関係しているのか、を問うことである。後者の問いについては、いじめに関する調査研究の結果を参考にする。以上を踏まえ、いじめが起きにくい学級集団づくりをする上で教師にはどういったことが求められるのか、という点について検討する。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（金沢大学・人間社会学域 学校教育学類）

授業科目名	学校心理学特殊講義
教員名（専門分野）	原田 克巳（臨床心理学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	必修・ <span style="border: 1px solid black;">選択</span> ・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	教職に関する科目
単位数・受講者数	2 単位 ・ 6 名
対象課程・対象学年	<span style="border: 1px solid black;">学部</span> ・修士・教職大学院 3 年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所に下線）	<p>授業の主題：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 児童期，思春期，青年期において示されやすい心理的課題について学ぶ。</li> <li>・ 学校における教育相談活動でどのような対応が必要となるかを考える。</li> </ul> <p>授業の目標：</p> <p>学校教育現場では，不登校，<u>いじめ</u>，非行，虐待など，様々な心理的問題への対応が迫られている。この授業では，こうした心理的問題，児童生徒の精神的健康に関わる事柄について，主体的学習を通して理解を深め，検討する。</p> <p>学生の学習目標：</p> <p>学校現場で教師が向き合うこととなるかもしれない，心理臨床的課題についての理解を深め，その対応例についても学習し，児童生徒理解の重要性とその方法を知り，児童生徒の精神的健康の維持，向上に関わる諸問題の理解を得て，また主体的な検討をすること</p>

**【授業内容】**

心理臨床的課題に関して興味関心のあるテーマについて、各自で事前学習を行い、その発表を行い、受講者全員で検討を行う。テーマは受講生によって設定する。

いじめに関する問題は、学生が主体的に取り上げたテーマに即して、随時取り上げ、検討する。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（金沢大学・人間社会学域 学校教育学類）

授業科目名	生徒の生活と進路の指導論
教員名（専門分野）	杉田 真衣 （教育学）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	<u>必修</u> ・選択・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目 生徒指導の理論及び方法・進路指導の理論及び方法
単位数・受講者数	2単位 ・ 学校教育学類 約100名 他学類生 約50名
対象課程・対象学年	<u>学部</u> ・修士・教職大学院 3年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所 に下線）	<p>第1回：オリエンテーション・生活指導とは何か</p> <p>第2回：若年労働の世界① 非正規労働の現状</p> <p>第3回：若年労働の世界② 正規労働の現状</p> <p>第4回：若年労働の世界③ 進路指導・キャリア教育をどう考えるか</p> <p>第5回：若年労働の世界④ 教育実践の検討</p> <p>第6回：階層・貧困と学校① 階層と学校文化</p> <p>第7回：階層・貧困と学校② 階層と友人関係</p> <p>第8回：階層・貧困と学校③ 教育実践の検討</p> <p>第9回：消費社会を生きる子どもたち① 消費文化と「成長」</p> <p>第10回：消費社会を生きる子どもたち② 消費文化と友人関係</p> <p>第11回：消費社会を生きる子どもたち③ 教育実践の検討</p> <p><u>第12回：いじめ① いじめの理論</u></p> <p><u>第13回：いじめ② 教育実践の検討</u></p> <p>第14回：不登校</p> <p>第15回：学校・教室をどのような空間にするか</p>

**【授業内容】**

(第12回 いじめ① いじめの理論)

いじめが発生するメカニズムを解明しようとする研究者たちの理論について学ぶことを通じて、いじめについての理解を深める。

(第13回：いじめ② 教育実践の検討)

教師による実践記録を検討することを通じて、学校でいじめが起きた時にどのように取り組むかについての考察を進める。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（福井大学・教育地域科学部）

授業科目名	発達科学総合文献研究（後期）
教員名（専門分野）	森 透（教職大学院）臨床教育学・教育実践史
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	<input type="checkbox"/> 必修・ <input type="checkbox"/> 選択・ <input type="checkbox"/> 選択必修・その他（ <input type="checkbox"/> ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	教職の基礎理論に関する科目
単位数・受講者数	2単位 ・ 7名
対象課程・対象学年	<input type="checkbox"/> 学部・ <input type="checkbox"/> 修士・教職大学院 2年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所に下線）	<p>&lt;平成 24 年度後期の授業計画・15 回&gt;</p> <p><u>1 いじめに関する全体的な説明（基本的な文献、文科省の関係資料、新聞記事等の説明）</u></p> <p><u>2-3 いじめに関する VTR 視聴（NHK 特集の 1995 年 10 月放映第 1 回「子どもたちの SOS」、第 2 回「教師に何ができるか」）</u></p> <p><u>4-6 いじめに関する資料収集と途中経過発表</u></p> <p><u>7-8 ①NHKBS 特集「世界のいじめ」視聴、②福井テレビ「いじめ特集」視聴</u></p> <p><u>9-13 継続していじめに関する資料収集と途中経過発表</u></p> <p><u>14-15 全体のまとめ</u></p>

### 【授業内容】

この授業科目（前期・後期開設、各2単位）は、発達科学講座の3つのコース（教育実践科学コース・臨床教育科学コース・障害児教育コース）の学生約30名が3コースの教員が開設する授業から自由に1つを選択する必修授業である。私は今年度前期は「子どもたちの今」、後期は「いじめ」をテーマにして、いろいろな資料を収集し読み込むこと、及び学生が2人程度のチームを組んで調査・研究し発表することを目指している。

I-① いじめに関する教育活動（正規のカリキュラム）

（信州大学・教育学部）

授業科目名	いじめ・不登校
教員名（専門分野）	大和 義史（非常勤講師）
教員の免許状取得のための必修・選択の区分	必修・ <u>選択</u> ・選択必修・その他（ ）
教育職員免許法施行規則上の位置づけ	第4欄下（生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目）
単位数・受講者数	2単位 ・ 37名
対象課程・対象学年	<u>学部</u> ・修士・教職大学院 2～4年生対象
授業計画 （いじめに該当する箇所 に下線）	<p>第1回：こころの教育と学級経営 －「いじめ・不登校・学級の荒れ」等、生徒指導・学級経営上の諸問題の現状と課題－</p> <p>第2回：行動・実践につなげる「心の教育」・どう学級経営を工夫・改善していくか</p> <p>第3回：積極的な「人間関係づくり」「学級づくり」に向けて（演習）</p> <p>第4回：学級集団を育てるエンカウンター －なぜ「育てるカウンセリング」なのか－</p> <p>第5回：誰でもできるエンカウンターの進め方（演習） －ゲームとどう違うのか？－</p> <p>第6回：誰でもできるエンカウンターの進め方（演習） －シェアリングをどう設定するか？－</p> <p>第7回：<u>「いじめ問題」の理解と対応</u> <u>－いじめ発生の要因と予防の実践化－</u></p> <p>第8回：<u>いじめ問題への具体的対応（事例研究）</u></p> <p>第9回：<u>いじめ問題の早期発見と早期対応のあり方（演習）</u></p> <p>第10回：「不登校」の理解と援助 －今日の不登校問題－</p> <p>第11回：不登校の子どもの心の理解（事例研究）</p> <p>第12回：不登校の子どもと保護者への支援・早期対応と登校刺激の与え方等</p> <p>第13回：不登校予防のためのエンカウンター（演習）</p> <p>第14回：対人関係と集団を育てる「ソーシャルスキル教育」</p> <p>第15回：ソーシャルスキル教育の実践化（演習）</p> <p>定期試験：レポート提出</p>

## 【授業内容】

### 第7回：「いじめ問題」の理解と対応ーいじめ発生の要因と予防の実践化ー

文部科学省の調査に基づきいじめの現状・実態を把握するとともに、以下の内容を取り上げいじめ問題に関する理解を深める。

- (1) 早期発見・早期対応
- (2) いじめている子ども
- (3) いじめられている子ども
- (4) いじめの周囲にいる子ども
- (5) 保護者への対応

### 第8回：いじめ問題への具体的対応（事例研究）

#### 事例1：小学校6年生女子

ートラブルが多く、学級集団の中で人間関係を築くことが難しい子どもに対する指導・援助ー

この事例では、対象児の行動特性を理解するとともに、場の空気を読めず孤立してしまう子どもへの支援のポイントを検討する。

#### 事例2：中学校2年生女子

ー携帯電話の掲示板を介したいじめへの指導ー

この事例では、いじめに至った背景を理解するとともに、対象生徒への対応、学校全体の指導体制、相互理解を深め立場を尊重する好ましい人間関係を育てる取り組みについて検討する。

### 第9回：いじめ問題の早期発見と早期対応のあり方（演習）

いじめ問題の早期発見に向け、対応および子どもを観察するポイントを教育活動の場面ごとに検討する。さらには、小学生や中学生が「いじめ」について考えるためのワークを演習で実施する。